

## 率東程氏の興起

大田 由紀夫

はじめに

明清期徽州における「名族」の一つに休寧の率東程氏がある。この一族が元末明初期の程維宗の代に経済的興隆を遂げ、以降、「名族」への上昇の道を歩み始めることは、よく知られている<sup>1</sup>。また、程維宗その人に関しても、屯溪の初期的発展に貢献した人物として、その名は広く知れ渡っている<sup>2</sup>。けれども、このように著名な存在であるにも拘わらず、程維宗がどのような巨万の富を築き上げたのかについては、ほとんど分かっていない。本稿は、明初における率東程氏の興隆をめぐって若干の新史料を提示して初歩的考察を行うものである。

### 一、率東程氏について

最初に率東程氏について概述する。この一族は明清時代の徽州府休寧県一六都（休寧東南部）に属する由溪に住む宗族である。「率東」とは、休寧を東流する率水（新安江）の東側（＝南岸）にある由溪を指すが、その族人は由溪対岸の湖辺・洪田などの「率西」にも多数居住し、率水の東西に広く分居していた。由溪は土名を「牛坑」といい、現在の安徽省黄山市屯溪区屯光鎮尤溪村一帯にあたり、ここにはなお程氏の末裔が居住している（二〇一三年一月現在）。

率東程氏は、程敏政撰『新安程氏統宗世譜』（成化一八年（一四八二）序刊本）にこそ名を見出せないが、つづく戴廷明等撰『新安名族志』前卷（嘉靖三〇年（一五五二）序刊本）や曹嗣軒撰『休寧名族志』卷一（天啓五年（一六二五）序刊本）になると、その記載が見出されるため、明代後半までには「名族」の地位を確立していたと考えられる。

両「名族志」や程氏の族譜などから判明する一族の来歴を簡単に記せば、つぎの通りとなる。率東程氏は黄墩程氏一派で、北宋の程頤（九八六～一〇四七）を始祖とし、崇寧元年（一一〇二）に黄墩南隣の草市へ移住した三世程趙（一〇五五～一一三三）の末裔である。元の至順元年（二三三〇）に九世程道（一二八八～一三五二）が草市から由溪（率東）に移住して以降、その子孫が当地に定着し、これより率東程氏としての実質的な歴史が始まる（一族の系譜については、次頁「率東程氏系図」を参照）。また、すでに指摘されている通り、この一族は明代には軍戸に属していた<sup>3</sup>。

率東程氏に関する基本史料としては、管見の限り、六種の族譜（総譜三種、支譜三種）、『率東程氏置産簿』（安徽省博物院所蔵）をはじめとする簿冊数点、『新安名族志』などの幾つかの関連文献が確認できる<sup>4</sup>。本稿で利用する文献の概要を記すと、次の通りである。

① 程憲撰『率東程氏重修家譜』一二卷、嘉靖一〇年（一五三二）序刊本・総譜。以下、『嘉靖譜』と記す。中国国家図書館所蔵。

② 程良錫撰『率東程氏重修家譜 附重修上草市程氏家譜』一二卷・附一卷、隆慶三年（一五六九）序刊本・総譜。以下、『隆慶譜』と記す。中国国家図書館・上海図書館ほか所蔵。

※率東程氏の総譜としては、他にも呉以声撰『率東程氏家譜』不分卷、正統三年（一四三三）刊本が中国国家図書館に所蔵されているが、筆者未見。

③ 程鵬南撰『率東程氏家乘』八卷（崇禎年間頃鈔本）・支譜。以下、『家乘』と記す。南京図書館所蔵（中国国家図書館本のマイクロフィルム）。

④ 程鴻緒撰『程氏所見詩鈔』二四卷、嘉慶一一（一八〇七）序刊本。日本国立公文書館内閣文庫所蔵。徽州程氏歴代の人々の詩を集成したものの。編者の程鴻緒は、率東程氏の出身。

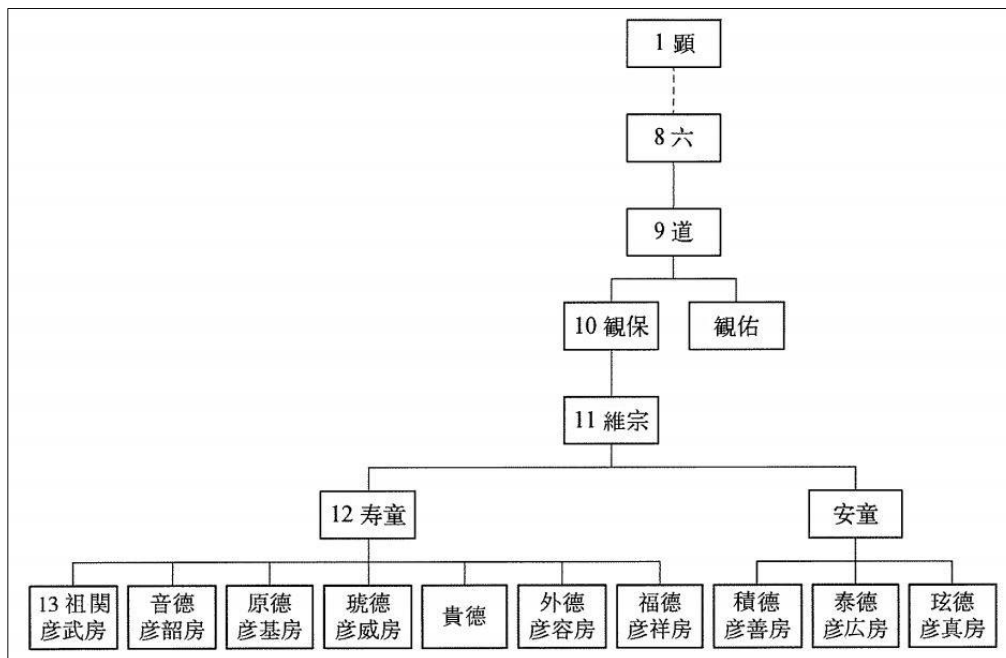
率東程氏は、元末明初以来、商業に従事する族人を代々輩出した商人一

族であった。その概要は先人によってある程度明らかにされているが<sup>5</sup>、本稿でも簡単に確認しておきたい。前記の諸文献によると、一族のなかで商人として史料的に確認できる最初の人物は、元末の一〇世程観保（二三一四〜六七）である。しかし、彼の伝記は「江湖に商遊」したと述べる程度で、『隆慶譜』巻二、一〇世「保一公」、その経商の実態は殆ど掴めない。ただ、晩年の観保は「先を奉じるに祠有り、賓を款すに館有り、居室の内、備具せざるなし」という中で余生を過ごしたと伝えられているため（同上）、この頃の率東程氏は既にそれなりの資産を有する富民であったと考えられる。

この程観保の一人息子が十一世程維宗（字は明徳。一三三二〜一四一三）である。既述のように、維宗の存在は従来からしばしば注目されてきた。それは、彼が一代で「休（寧）・歙の田産四千余畝、佃僕三百七十余家」という一大資産を形成し、「屯溪に於いて店房四所を造り、共に屋四十七間、以て商賈の貨を居き、故に税糧は一県に冠た」る存在となったが（『嘉靖譜』巻三、一一世「宗一公」、その致富が経商により達成されたからである。ただし、維宗の伝記でも、彼が「商賈に従事し、貨利の獲、多く望外に出で、一を以て十を獲ること常に之あり、神助あるが若し。…（略）…是れより家業大いに興」った（同前）、とその商業活動が抽象的に語られるだけである。よって、『嘉靖譜』・『隆慶譜』からは、彼が経商を通じて巨万の富を獲得し、率東程氏発展の礎を築いた事実は確認できるものの、どのような商売を営んで「発財」（＝金持ちになる）したのかという肝心な情報は入手できない。

なお、維宗には寿童（一三六四〜一四二二）・安童（一三六八〜九四）という二人の息子がおり、長男寿童が息子七人（うち一人は夭逝）を、次男安童が息子三人を儲けた（率東程氏系図）。維宗の孫にあたる九人は、永楽一

率東程氏系図



二年（一四一四）に祖父維宗以来の同居共財關係を解消し、『嘉靖譜』卷四、一三世「城（公）」、率水の東西に分居して九つの支房（彦武・彦韶・彦基・彦威・彦容・彦祥・彦善・彦広・彦真）を形成していった（『隆慶譜』）。以後その子孫たちが増加することで一族の勢力を拡大し、徽州の「名族」としての地位を確立していくのである。

なお、程維宗の没後も、族人の商業活動（客商、典商など）は連綿と継続されていた。たとえば、明代に商業に従事していたことが史料的に判明する一四〇一八世の族人は都合二一名を数える。程氏族人による経商の事例は、一四世紀後半に「発財」した一七世紀前半以降、つづく一二・一三世を除き、一五世紀前半から一七世紀前半に至るまでほぼ切れ目なく見出すことができる<sup>6</sup>。

## 二、程維宗の「発財」

では、程維宗は如何にして一大資産を築き上げたのだろうか。これまで維宗について論じる場合、『隆慶譜』が参照されるのみであった。しかし既述のように、『隆慶譜』以外にも率東程氏の関連史料がいくつか存在しており、先行研究はこれらを利用してこなかった。以下では、そうした諸史料を利用し、率東程氏の興隆について若干の考察を行う。

まず、程維宗の商業活動に言及する史料としては、その子孫の記した文章が残されている。次に引用したのは、程維宗が無為真人（正一教第四三天師の張宇初）から贈られた「知還軒図」（知還軒は、維宗がその晩年に邸宅の側に建てた居室）に、明末の人・程逢明が題した詩の序文である（『程氏所見詩鈔』卷一、程逢明「題先世祖仁叟公知還軒遺図序」）。

仁叟公、諱は維宗、字は明德、由溪の遷祖なり。倜儻にして大度有り、

国初洪武年、公、糧を輸して以て軍儲を足し、塩を請いて以て羣費を足し、兼ねて余沢を以て郷里に及ぼし、故に当時名重ぜられ、南北に

程仁叟有るを知らざる者なし。公、盛名の副い難きを以て、旋いで山林に隠れ、居側に於いて軒を築き、知還と曰う。…（略）…後、公、龍虎山に薦醮し、無為真人並に其の景を図きて以て贈る。今に迄ること二百余年なり。【史料①】

仁叟公、諱維宗、字明德、由溪之遷祖也。倜儻有大度。国初洪武年、公輸糧以足軍儲、請塩以足羣費、兼以余沢及郷里、故當時名重、南北無不知有程仁叟者。公以盛名難副、旋隱山林、於居側築軒、曰知還。…（略）…後公薦醮龍虎山、無為真人並図其景以贈。迄今二百余年矣。

史料①の太字部分にある通り、程維宗は、洪武年間（一三六八〜九八）に辺境への軍糧納入の見返りとして専売品である塩の販売を許可する「開中法」のもとで塩取引に従事し、生計を立てていたという。この商行為だけが言及されている点から判断すると、維宗の主要な商業活動が塩取引であった、と程逢明は認識していたようである。この事実は、『嘉靖譜』や『隆慶譜』からは知り得ない貴重な情報といえよう。

とはいえ、程逢明は程維宗よりも二〇〇年以上の子孫である（迄今二百余年矣）。果たしてその記述はどの程度の信憑性があるものなのだろうか。そもそも、明末の程逢明が明初の程維宗に関する事跡を一体どこから知り得たのか。後代の子孫が前記のような認識を持つには、必ずや何らかの典拠が存在していたはずである。ではそれは何だったのか。

ここで参照すべきが『家乗』である。『家乗』は、率東程氏の一支派<sup>7</sup>の族譜（支譜）であるが、一族の事実上の始祖ともいえる程維宗に関する同時代史料を数多く収録している興味深い文献である。そして、さきの史料①との関わりでは、その巻五に収められる汪仲魯「知還軒記」（洪武二七年（一二九四）二月記）の次のような一節が注目される。

兵革甫めて定まり、（程維宗）精舎を率東に崇く構えて以て居り、老

成せる数輩に任委し、糧を辺に輸し、以て軍儲を給し、塩を官に請い、以て群費を足し、土田を拡弘し、以て儲積の末に資し、拓く農佃を集め、以て力役の繁に備う。【史料②】  
兵革甫定、崇構精舍于率東以居、任委老成数輩、輸糧于辺、以給軍儲、請塩于官、以足群費、拡弘土田、以資儲積之末、拓集農佃、以備力役之繁。

一見して明らかのように、史料②には、史料①の文言（輸糧以足軍儲、請塩以足羣費）と非常によく似た表現（輸糧于辺、以給軍儲、請塩于官、以足群費）がみられる。このような文言の類似は、程逢明が史料②から程維宗の発財に関する情報を得ていた可能性の高いことを示唆するだろう。さらに、元末の動乱が終息した後、辺境（北辺）に向いて中塩したのが維宗本人ではなく、彼は徽州に留まり、数名の「老成」者に実際の取引を委託していたことも、史料②は教えてくれる。なお、この種の取引へ参入するためには相応の資金を必要としたはずだが、その際、父・程觀保以来の蓄積が原資になっていたのではないかと推測される。

この他にも、程維宗の塩取引に触れる史料が『家乗』内に見出せる。維宗は建文三年（一四〇一）正月に著名な『鄭氏旌義編』（あるいは『鄭氏家範』とも称された）に倣って「率東程氏家訓」（全一六条）を作成していた。『家乗』はこれも収録しているが（『家乗』巻八、程維宗「率東程氏家訓」）、その家訓に添えられた前文には、

商賈に委人（任？）し、糧を辺に輸し、塩を官に請い、産業を増羨すること、旧に十倍し、賦役重難にして日に給するに暇あらず【史料③】  
委人商賈、輸糧于辺、請塩于官、増羨産業、十倍于旧、賦役重難、日不暇給。

という維宗自身の述懐が綴られている。この史料③や前出史料②などの記

述を総合するならば、洪武三年（一三七〇）の開中法実施以後に程維宗は塩取引に参入したこと、中塩を委任した「老成数輩」とは経験豊富なベテランの「商賈」であったこと、その収益によって土地所有を大幅に拡大したこと、そのため重い「賦役」負担を課されるに至ったこと、などの事実が確認できる。以上のことから、程維宗（および率東程氏）の経済的興隆は、開中法下の塩取引を通じて獲得した富によるものであった、と結論付けてよいだろう。

ここまでの論述で率東程氏の興起の背景の一端が明らかになったと考えるが、他方で不明な点も依然としていくつか残されている。たとえば、程維宗が取引を委託した「商賈」とは一体どこの誰で、維宗とどのような繋がりを持つ人々だったのか、また彼がこの取引に参入するようになった経緯とはどんなものであったのか、などに関しては、現在のところほとんど不明である。これらの問題究明は、すべて将来の課題とせざるを得ない。

## 小 結

建国まもない明朝が辺境の軍糧調達のために開中法を実施し、その結果として山西商人などが巨万の富を築いていったことはよく知られた事実である。本稿で取り上げた程維宗も、この機を捉えて経済的に浮上した富商の一人だったのであり、彼の致富が以後の率東程氏の「名族」への上昇を準備することになるのであった。

とはいえ、徽州商人（徽商）が塩取引に本格的に進出して多数の大商人を輩出するようになるのは、内地の塩運司等に銀を直接納入して塩の販売権を得る運司納銀制が実施された明代中期（一五世紀後半～一六世紀前半）以降のことであったと一般に考えられている。程維宗の経済的成功はそうした一般動向に先行する事例として見なすことができるが、当初における率東程氏の興起と中期以降の徽商の台頭との間における関連性の有無・何如については、今後慎重に検討していく必要があるだろう。

ただ、引用史料にもあったように、程維宗の塩取引は単独ではなく、複

数の「商賈」と連携して行われていた。この点を考慮すると、彼の活動は孤立した例外事例ではなく、明初の徽州社会でそれなりの広がりを持つ商行為だったようにみえる。すでに先行研究によつて、塩商として活躍した明初の徽商の事跡が少なからず発掘されており<sup>10</sup>、また宋元期における経商の伝統を基礎として、当該期に徽州（とりわけ歙西・休寧東南一帯）の人々による商業活動が活発化していったことも指摘されている<sup>11</sup>。このような動向は、まさに率東程氏の興起の軌跡とも重なる。

周知のように、大規模な軍需物資の北辺供給を必須とする漢人統一政権・明朝の成立は、巨富をもたらす塩取引の参入に有利な環境を徽州の人々に提供したが、これは南宋や元の時代にはない新状況の出現といえる。こうした文脈から明初徽州の経済動向を顧みれば、率東程氏の場合と同様、開中法下の塩取引から生じた巨大な富が当地を潤して人々の商行為の活発化を促す原動力になったことは想像に難くない。もしそうであるなら、率東程氏の興起過程は、明代における徽商の台頭という歴史事象を理解する上でも多くの示唆を与えてくれるように思われる。

## 註

- 1 劉和恵 一九八二b、欒成頭 一九九六など。
- 2 『中国古鎮游』編輯部 二〇〇五など。
- 3 欒成頭 一九九六、許敏 一九九八。
- 4 率東程氏に関する基本諸史料の詳細については、大田 二〇一二を参照。
- 5 劉和恵 一九八二b、欒成頭 一九九六など。
- 6 大田 二〇一二。
- 7 彦祥房系の一六世程讓（一四六四〜一五二八）の子孫の系列。
- 8 寺田隆信 一九七二など。
- 9 藤井宏 一九五三・五四、張海鵬・王廷元 一九九五など。
- 10 張海鵬・王廷元 一九九五、汪崇賞 二〇〇四、王裕明 二〇〇七。
- 11 劉和恵 一九八二a、王裕明 二〇一五。

## 引用文献（刊行年は原則として初出年を記す）

- 劉和恵 一九八二a 『徽商始於何時』『探古集』安徽人民出版社、二〇〇九、所収  
 —— 一九八二b 『明代徽商程鎮家世考述』『探古集』安徽人民出版社、二〇〇九、所収

欒成頭 一九九六 『明末典業徽商一例——崇禎二年休寧程虛宇立分書』研究——『徽州社会科学』一九九六・三

『中国古鎮游』編輯部 二〇〇五 『中国古鎮游 一四 徽州』陝西師範大学出版社

許敏 一九九八 『明代商人戸籍問題初探』『中国史研究』一九九八・三

大田由紀夫 二〇一二 『徽州における私家文書の伝来——率東程氏置産簿』をめぐって——伊藤正彦編 『万曆休寧県二七都五図黃冊底籍』の世界』二〇〇九〜二〇一一年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書、所収

寺田隆信 一九七二 『山西商人の研究』東洋史研究会

藤井宏 一九五三・五四 『新安商人の研究（一）〜（四）』『東洋学報』三六一〜四

張海鵬・王廷元 一九九五 『徽商研究』安徽人民出版社

王裕明 二〇〇七 『明代前期的徽州商人』『安徽史学』二〇〇七・四

—— 二〇一五 『宋元时期的徽州商人』『安徽史学』二〇一五・三

汪崇賞 二〇〇八 『明清徽商經營淮塩考略』巴蜀書社

※本稿は、さきに中国語で公刊した「率東程氏之興起」（王振忠・劉道勝主編『徽州文書与中国史研究 第二輯』中西書局、二〇二一、所収）の日本語原稿に補訂を加えたものである。